

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## マオリ研究の系譜とその展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石森, 秀三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004608">https://doi.org/10.15021/00004608</a>

## マオリ研究の系譜とその展開

石 森 秀 三\*

I. はじめに	3) 専門分化
II. マオリ研究の系譜	6. 第五世代
1. 探検家・宣教師・商人	III. テーマ別研究動向
2. 植民者たち	1. マオリ文化一般
3. ポリネシア協会の設立	2. 社会組織
4. 第三世代	3. 民族宗教
1) 伝統文化の体系的復元	4. 民族芸術
2) 文化変容の研究	5. 言語文化
3) マオリ人によるマオリ文化の研究	6. コミュニティー研究
4) Firth・Keesing・Rangi Hiroa	7. Rakau Studies
5. 第四世代	8. Urban Maoris
1) マオリ学の成立	9. その他
2) <i>Maoritanga</i> の研究	文 献

### I. はじめに

1975年は、マオリ研究にとって、新しい時代のはじまりを示唆する、重要な年であった。この年に、ニュージーランドの大学ではじめて、マオリ学 (Maori Studies) の講座が創設されたからである。一つの研究分野が意義ある発展をとげるためには、大学なり、研究所なりで、独立の講座をもたなければ、多くをのぞむことはできない。独立の講座があってはじめて、研究・教育の両面において一貫したプログラムを推進することができる。この意味からすれば、マオリ学の講座が大学に新設されたということは、マオリ研究が今後、独自の研究・教育プログラムをもって新たな展開をとげるための足がかりをつかんだことを示唆している。

そこで、これを機会に、いままでにおこなわれたマオリ研究の回顧と展望をおこなおうとするのが、本稿の意図である。本稿では、まずはじめにマオリ研究の歴史的展開を論じ、ついでテーマ別の研究動向についてふれる予定である。

わたしは、1969年から71年にかけて約2年間、ニュージーランドに留学する機会を

\* 国立民族学博物館第4研究部

えた。その間に、マオリ研究に関する文献目録の作成を試みたことがある。しかし、その目録を公にする機会のないまま今日にいたった。ところが幸いにも、1975年に短期間ではあるが、ニュージーランドを再訪する機会があり、最近のマオリ研究の動向を知ることができた。そのため、本稿は、以前に作成した文献目録と最近入手した研究動向を軸にして、マオリ研究の回顧と展望を試みたものである。

マオリ研究の動向については、E. Beaglehole が1937年に紹介したほかはあまり論じられていない [BEAGLEHOLE 1937]。また同様に、マオリ研究の文献目録については、C. R. H. Taylor がまとめたものがたいへんすぐれているが、それは1960年以前に刊行された文献のみをあつかっている [TAYLOR 1965]。1960年代および70年代に公にされた文献を包括的に集成する試みは、まだおこなわれていない。そのため、本稿は、これらの空白をうめるためにまとめたものであり、マオリ研究推進のための基礎的作業の一環である。

なお、マオリ文化に関する考古学的研究については、本稿では一切ふれていない。これについては、すでにかんがりの研究の蓄積があり、それらを評価するのは、わたしの任ではないからである。

## Ⅱ. マオリ研究の系譜

### 1. 探検家・宣教師・商人

マオリ人と最初に接触した白人は、オランダの探検家 Abel Tasman であった。彼は、1642年にニュージーランドの南島を発見し、マオリ人とはじめて接した。しかし、その出会いは決して友好的なものではなかった。こぜりあいから両者とも死者をだしたからである。部下を殺された Tasman は、この島は植民地に適さないと判断した。この不幸な出会いは、マオリ人にとっては幸いであった。その後、約一世紀間にわたって、白人の視野からまぬがれたからである。

長い沈黙をやぶって、ニュージーランドを再発見したのは、英国の探検家 James Cook である。彼は、1769年に、ニュージーランドの北島を発見した。Tasman の場合と同様、Cook とマオリの出会いも緊張をはらんだものであった。しかし、幸いなことに、Cook はタヒチ島の酋長を一人同行していたので、この酋長の仲立ちによって、マオリとの危機を回避できた。ここにおいて、マオリ人と白人のあいだにおいて、はじめて友好関係が樹立された。マオリ人の存在が、ヨーロッパ世界にはじめて紹介されたのは、この Cook の探検隊の報告書によってである [Cook 1784]。

ついで、19世紀にはいると、オーストラリアのアザラシ漁船や捕鯨船が、ニュージーランドの近海にあらわれはじめた。これらの船は、食料と燃料の捕給のために、

海岸近くに住むマオリ人と接触した。その間にも、各国から、探検隊がやってきた[SAVAGE 1807]。探検家のつぎにあらわれたのは、宣教師である。1814年に、オーストラリアから、三人の宣教師が到着した。キリスト教の伝来である。これらの宣教師と相前後して、マオリ人のもとにやってきたのは、英国の商人たちである。商人たちは、鉄斧やナイフや衣類と交換に、木材と亜麻を手に入れた。探検家・宣教師・商人たちは、ヨーロッパの列国が植民地をつくるときに、つねにその先兵の役をはたしている。ニュージーランドの場合もまた、その例外ではなかった。

その上、探検家・宣教師・商人たちは植民地化の露払いだけでなく、植民地に住む未開人についてのレポーターの役目もになっていた。彼らは、マオリ人の未開生活のことを、ヨーロッパ世界に細かく書きおくれた[CRAIK 1830; EARLE 1832; YATE 1835; BANNISTER 1838; DIEFFEBACK 1843]。ご多分にもれず、彼らの著した見聞記は、偏見にみちたものであった[GEDDES 1960: vii-ix]。しかしながら、いかに偏見に満ちているとはいえ、彼らの見聞記は文化接触時におけるマオリ人の伝統的生活の一端を知るための唯一の資料であり、その点では貴重である。

## 2. 植民者たち

1840年は、その後のマオリ人の不幸な運命のはじまりを暗示する、重要な年であった。この年に、マオリの諸部族と英国のあいだで、ワイタング条約がむすばれ、ニュージーランドにおける英国女王の主権が確定した[SINCLAIR 1969: 70-73]。この条約が締結されたことによって、英国はニュージーランドを自らの領土として専有することとなった。マオリ人は条約の重要性を十分に認識しないままに調印をおこなったのである。しかし、この条約はすぐに効力を発揮し、この年を境に英国からの移民が年を追って、急増した。移民の大量流入は必然的に、土地の需要の増加を意味しており、先住民族であるマオリ人と白人のあいだで土地をめぐる紛争が不可避となった。

1860年に、マオリ人と白人のあいだで、土地をめぐる各地で戦争がおこった。マオリ戦争(Maori Wars)もしくは土地戦争(Land Wars)とよばれる争いの勃発である[DALTON 1967: 174-180]。戦争は約5年間にわたって継続された。しかし、銃火器をはじめとする物量に歴然たる差がある以上、結末は戦う前から明白であった。戦争は白人側の勝利におわった。戦争終結後、白人が真先におこなったのは、マオリの諸部族の土地の没収であった。戦争賠償として没収したのである。これによって、約300万エーカーという広大なマオリの土地が、白人の手にわたった[SORRENSEN 1965: 28-29]。戦争にともなう社会的混乱の上に、なおかつ土地まで奪われたマオリ人は、自暴自棄な生活を余儀なくされ、伝統文化が急速にくずれはじめた。急激な文化変容のはじまりである。

マオリ人にとって、英国からの植民者は不幸をもたらす使者であった。けれども、

マオリ研究の歴史からすると、別の評価が可能である。つまり、マオリ人に不幸をもたらした、英国からの初期の植民者たちは、その後のマオリ研究にとって、その礎をきずいた人たちであった。

英国本国の政治犯の流刑地としてスタートした、オーストラリアの場合と異なり、ニュージーランドへの植民はかなり理想主義的色彩の強いものであった。植民者たちは、ニュージーランドにおいて、理想社会の建設をめざしたのである。しかしもちろん、現実世界は予想外にきびしく、理想の実現は容易ではなかった。しかしながら、植民が本格的にはじまって間もなく、これらの英国からの植民者はニュージーランド協会 (New Zealand Society) を設立した。1851年のことである。この協会は、ニュージーランドの自然と原住民マオリの文化を調査・研究することを目的としてつくられたものである。この協会はより発展して、1867年にニュージーランド王立協会 (Royal Society of New Zealand) となった [CONDLIFFE 1971: 147-148]。このほか、初期の植民者たちは、入植して時を経ずに、白人の主要な居住地であった、オークランド、ウェリントン、カンタベリー、オタゴに、それぞれ博物館を建設した。そればかりか、これらの主要地に大学も設立した。植民の初期という開拓状況のなかでは、腕力がすべてであり、知力などは必要ないはずであった。けれども、ニュージーランドの初期の植民者は、そのような状況のなかで、つぎつぎと文化事業を推進したのである。

荒れた植民地のなかにつくられた知的雰囲気のもとで、マオリ研究の礎がかためられた。まず、宣教師である W. Williams [1844] が、マオリ語辞典を完成させた。この辞典は、その後、編者をあらたにして、何回か改訂がなされ、マオリ語のもっともすぐれた辞典として現在ももちいられている [H. W. WILLIAMS 1971]。同じく宣教師の E. Shortland [1856, 1882] が、マオリの伝統的宗教のことをくわしく調べている。また、ニュージーランド総督をつとめた G. Grey [1855] が、マオリの神話について本を出版している。このほか、軍人、政治家、官吏、商人など、多彩な職業をもつ人々が、マオリ文化の諸相について記述している [TAYLOR 1855; MANING 1863; WHITE 1887; COLENSO 1888]。

これらの初期の植民者たちがおこなったマオリの文化と社会に関する研究は、現在の水準からすれば、まさにアマチュアの域を脱していない。けれども、白人との文化接触にともなう文化変容期にあった、マオリの伝統文化を記録したという点で、彼らの仕事は貴重である。しかも彼らは、ニュージーランド協会や博物館や大学を設立したことによって、その後のマオリ研究の基礎をきずいた。この意味で、彼らこそマオリ研究の第一世代とみなすべきである。

### 3. ポリネシア協会の設立

1892年に、ポリネシア協会 (Polynesian Society) が設立された。この協会は、マ

オリ文化およびポリネシア文化の民族学的研究を振興する目的で設立されたものである。この協会の設立に参画したのは、S. Percy Smith, E. Best, A. Hamilton などである。Smith は民族学に多大の興味をもつ高級官吏であり、Best と Hamilton はともにウェリントンにある Dominion Museum (現在は National Museum となっている) のマオリ研究部門のスタッフである。

彼らが、この協会を設立しようとしたことのより現実的な意図は、マオリ研究やポリネシア研究の業績発表の場として、学術雑誌を創刊することであった [CONDLIFFE 1971: 148]。つまり彼らは、いくらマオリの文化を調査したとしても、それを発表する場がなければ、それは無意味であり、なにのほげみにもならない、と考えたのである [CONDLIFFE 1971: 148]。彼らは資金を調達し、協会の雑誌である *Journal of the Polynesian Society* (以下、*J. P. S.* と略す) を、1892年に発刊した。この雑誌は現在でも、年四回刊行されており、オセアニア地域研究における、もっとも権威ある国際的学術雑誌の一つとなっている。

このポリネシア協会を舞台に、マオリ研究をすすめた人々のうち、もっとも重要な仕事をしたのは、E. Best である。彼は Dominion Museum のマオリ研究部門のスタッフとして、各地で調査に従事し、ぼうだいな量の報告書を執筆した。彼の研究は、マオリの文化と社会に関するほとんどすべての面におよんでおり、マオリ研究の一大巨人である。彼の業績については、本稿末の文献を参照いただきたい。

このほかに、A. Hamilton がいる。彼は、Dominion Museum の館長をつとめた人物であり、そのマオリ研究における業績としては、マオリの木彫文化の研究が有名である [HAMILTON 1896, 1901]。また、S. P. Smith [1899, 1910a, 1910b, 1913] もマオリ文化に関する本を執筆している。

Best をはじめとして、ポリネシア協会の設立に参画し、マオリ研究を積極的に推進した人たちを、マオリ研究の第二世代として位置づけたい。彼らは、第一世代よりも、より客観的に、マオリ研究をすすめ、多数の良質の研究資料を *J. P. S.* などに発表している。ただし、この世代は、良質の資料の収集はおこなったが、それを体系づけて分析することは決しておこなわなかった [FALLA 1973: 2]。マオリ文化に関する資料の収集者ではあっても、分析して体系づけることは決しておこなわなかった。その意味では、彼らはやはり、民族学のセミ・プロとみなすべきかもしれない。それもそのはずで、彼らは、博物館のスタッフなどであったが、ニュージーランドに移民する以前から民族学者であったのでは決してない。むしろ、民族学に興味をもったのは、入植してからのことである。いわば、趣味が高じて、民族学の世界に足を踏み入れた人たちである。この意味からすれば、むしろ、彼らがマオリ文化に関する良質の基礎データを蓄積したという事実こそ、なにをさておいても評価されるべきと考える。わたしが、彼らをマオリ研究の第二世代とみなす所以がここにある。Best を

はじめとする、この第二世代によってなされた、良質のデータの蓄積があったからこそ、つぎの世代における、マオリ研究の新しい展開が可能となったのである。

このマオリ研究の第二世代のうち Best と Smith については、そのマオリ研究およびポリネシア研究に対する功績を記念して、それぞれ **Elsdon Best Memorial Award** と **S. Percy Smith Medal** というマオリ研究を奨励する賞が創設され、後進のはげみとなっている。

#### 4. 第三世代

##### 1) 伝統文化の体系的復元

Best をはじめとする、マオリ研究の二代目の研究者が残した、良質のデータの分析は、つぎの世代にゆだねられた。この仕事に一番最初に着手したのは、**Raymond Firth** である。それはちょうど1920年代の半ばごろのことである。彼は、マオリの経済活動に焦点を合わせ、一代目と二代目の研究者が残した文献資料を駆使して、マオリの経済組織を体系的に分析した。彼は、この仕事を、留学先のロンドン大学で **B. Malinowski** の指導のもとにやりあげ、博士論文として提出した。彼が27歳のときの仕事である。この論文はただちに出版され [**FIRTH 1929**]、その30年後に改訂版がだされている [**FIRTH 1959**]。この大著は、経済のことだけでなく、社会構造や宗教なども広くとりあつかっており、現在においても、マオリ研究の第一級の文献である。**Firth** は、このほかにも、マオリの文化と社会に関するいくつかの小論文をまとめている [**Firth 1922, 1925a, 1925b, 1925c, 1926a, 1926b, 1926c, 1927**]。

このほか、**Otago Museum** の研究スタッフの一人であった、**H. D. Skinner** は、マオリ文化の地域的差異に着目して、文化領域理論を援用して、マオリ文化のより包括的理解を試みている [**SKINNER 1921, 1924**]。また、**J. C. Anderson** は、マオリの音楽や宗教などについて、体系化の努力をしている [**ANDERSON 1934, 1940**]。

**Firth** をはじめとする、これらの研究者たちは、それまでのマオリ研究の伝統の上にならって仕事をすすめており、その意味でたいへんオーソドックスである。彼らの仕事を一言で評価するならば、それは白人と接触以前のマオリの伝統文化の体系的復元を試みたということにつきる。一代目と二代目が、マオリの伝統文化の個々の文化要素をばらばらに記録して蓄積したのに対し、**Firth** をはじめとする第三代目の研究者たちは、蓄積された資料の体系的分析をおこなったのである。

##### 2) 文化変容の研究

**Firth** が、文献資料をもちいて、マオリの伝統的経済組織の体系的研究にとりくんでいたころ、**F. M. Keesing** がマオリ研究に一大革新をおこしつつあった。それまでのマオリ研究者のすべてが、白人と接触以前のマオリの伝統文化の復元に焦点を合わせていたのに対して、**Keesing** は白人との文化接触によってひきおこされた文化変容

の問題をテーマとしてかかげたのである。文化変容の研究方法として、彼が採用したのは、一つの特定のコミュニティーの長期にわたる住み込み調査であった。彼によって始めて、フィールド・ワークの手法がマオリ研究に導入されたのである。

彼は、自らの調査地として、北島東海岸の Ngatiporou 部族の一つのムラを選び、そこでフィールド・ワークをおこなった。彼は主として、文化接触によって、マオリの伝統的な社会構造がどのように変化したかを調査した [KEESING 1928a, 1928b, 1929]。Keesing につづいて、何人かの研究者がその後、文化変容の研究ととりくんでいる。この点については、次章でくわしく紹介する予定である。

いずれにしても、Keesing は、マオリ研究に二つの革新をもたらした。一つは、それまでの伝統文化復元志向に対して、文化接触以後の文化変容を研究テーマとしてとりあげたことであり、もう一つは、マオリ研究のなかにフィールド・ワークの手法を導入したことである。この二つの革新は、その後のマオリ研究の展開に重要なひろがりをあたえた。この点で、Keesing の仕事は高く評価されている。

### 3) マオリ人によるマオリ文化の研究

一代目、二代目を通じて、マオリ研究をおこなってきた人々は、すべて白人であった。1860年代のマオリ戦争で白人にやぶれて以後、マオリは常に、社会的・経済的・政治的に、白人の劣位におかれ、貧困状態におかれてきた。このような抑圧された状況にあって自分の文化を自省する余裕などなかった。

しかし、20世紀に入ってから、状況が変わった。マオリの社会に新しい指導者があらわれたのである。それは Apirana Ngata というマオリ人であり、白人の設立した大学を卒業したインテリであった。彼は、白人優位のもとでこのまま文化変容が進行するならば、やがてマオリの伝統文化は崩壊してしまい、一つの民族としてのアイデンティティーを喪失する危険性のあることをさとった。そこで、彼はまずはじめに、マオリの政治的・経済的地位の向上を目的とした運動をおこすことにした。いわゆる、マオリ近代化運動である。この運動は、一言でいうならば、白人の制度をマスターし、そしてそれにうまく適応することによって、マオリの近代化を成就しようとするものであった。

Ngata は、政治・経済面でマオリの近代化をすすめる一方で、この難局をのりきるためには、マオリの人々が一つの共通の民族であるという自覚をもって一致団結する必要があることを感じた。そして団結するためには、民族の共有財産である伝統文化の復興以外にはないと考えた。民族文化の復興を通じて、一つの民族としてのアイデンティティーを確立しようとしたのである。

このマオリの伝統文化の復興という仕事を実際に推進したのが Te Rangi Hiroa (Peter Buck) である。彼はアイルランド人を父とし、マオリ人を母とする混血であり、オタゴ大学で医学を学んだエリートであった。しかし、大学在学中に知り合った

Ngata のマオリ近代化運動に賛同して、この運動に身を投じた。最初は、医者としての特技をいかして、とくにマオリ人の衛生面での生活向上につくした。その後、民族学の分野に足をふみいれ、マオリの伝統文化の研究に従事し、マオリ人のためにマオリ文化の啓蒙をおこなった。その間に、彼はマオリに関する数多くの論文を執筆するとともに、大著を何冊か著している。それらの業績については、本稿末の文献を参照いただきたい。いずれにしても、彼がマオリ人としてはじめて自らの文化の研究に本格的に従事したということは、その後のマオリ研究の展開に重要な変化をあたえることになった。なぜなら、その後、彼をマオリ人によるマオリ研究の輝かしい先駆者として、マオリ人の若いインテリがマオリ研究にとり組みはじめたからである。

ここにおいて、マオリ人によるマオリ文化の研究が本格的に始動しはじめたのである。Rangi Hiroa はその足がかりをきずいたという点で、現在でも高く評価されている。

#### 4) Firth・Keesing・Rangi Hiroa

すでにのべたように、マオリ研究の第三世代において、大きく分けて3つの方向への展開があった。第一の展開は、Firth たちによる既存の文献資料の体系的分析である。ついで、第二の展開として、Keesing によってはじめられた、フィールド・ワークによる文化変容の研究がある。そして最後に、Rangi Hiroa をその輝かしい先駆者とする、マオリ人によるマオリ研究のはじまりがある。これらの新たな展開は、その後のマオリ研究にとって、重要な革新をもたらした。

しかしながら、これらの新しい展開の旗頭である、三人の学者はマオリ研究に革新をおこしたにもかかわらず、それを一つのステップとして、それぞれニュージーランドを離れ、英米に転出して、そこでオセアニア研究ととりくんだ。

たとえば、Firth はニュージーランドで経済学を学んでから、ロンドン大学で人類学の博士号を取得した。そして、メラネシアのティコピア島やマレー半島で調査に従事したのち、永らく London School of Economics の人類学教授をつとめ、英国におけるオセアニア研究の中心人物として活躍した。

同様に、Keesing も、ニュージーランドで博士号を取得してから、アメリカに渡り、ハワイ大学とスタンフォード大学で人類学科の創設に参画し、アメリカにおけるオセアニア研究のみならず、文化人類学の理論的研究の一大推進力となった [石森 1973]。

また、Rangi Hiroa は、ニュージーランドでマオリ研究に従事したのち、ハワイに渡り、Bernice P. Bishop Museum の館長を永らくつとめ、ポリネシア研究の権威として、つぎつぎと大きな仕事を推進した。英国は、1946年に、Rangi Hiroa に対してナイトの爵位を授与した。Sir Peter Buck の誕生である。彼のすぐれた民族学的研究が公に認められたのである。

このように、第三世代の旗頭である、この三人の研究者は、マオリ研究に意義深い革新をもたらしたあと、それぞれ英米に頭脳流出し、ロンドン、スタンフォード、ハワイにおいて、オセアニア研究の推進者となった。この点、三人のキャリアがあまりにも符合していることが興味深い。しかし、いずれにしても、この三人によって、はじめてマオリ研究はその学問的基盤がかためられたのである。

## 5. 第四世代

### 1) マオリ学の成立

Rangi Hiroa をはじめとする第三世代の研究者がうえつけた、マオリ研究の新しい芽は、次代のマオリ人学者によってはぐくまれた。マオリ研究の第四世代の登場である。それは1950年代のはじめのことである。B. Biggs (現在、オークランド大学人類学学科主任教授) が、ニュージーランドの大学で最初のマオリ語講師として就任したが、1952年のことであり、この人事はマオリ研究の第四世代の登場を象徴的に物語っている。つまり、第四世代は、大学の研究室を舞台にして、マオリ研究をすすめたのである。

けれども、マオリ研究が学界において市民権、つまり講座 (Chair) を獲得するまでには、相当の年月を要した。それまでのあいだは、人類学の研究室に席をおいて、マオリ研究をすすめた。一つの学問分野が、大学において講座をもたなければ、研究・教育の両面において、大きなハンディキャップをせおうことになる。講座をもつことによってはじめて、一貫したプログラムをもって研究・教育をすすめることができる。

この意味で、1969年は、マオリ研究にとって、記念すべき年であった。この年に、B. Biggs がニュージーランドではじめてのマオリ学の教授 (オークランド大学) に任命されたからである。この年はまた、ニュージーランドそのものにとっても記念すべき年であった。というのは、この年は、Captain James Cook がニュージーランドを再発見した1769年から数えて、ちょうど200年目にあたったからである。そのため、国をあげて盛大に200年祭がくりひろげられた。それに比べれば、オークランド大学におけるマオリ学講座の創設は多くの関心をひくことはなかった。しかしそれは、マオリ研究にとっては、第一級のビッグ・ニュースであった。これによってはじめて、マオリ研究が独立の学問分野として、ニュージーランドの学界において市民権を獲得できたからである。

しかし正確にいうと、この時点ではまだ完全に、学界における市民権を獲得したというわけではなかった。というのは、Biggs 教授の講座は、Chair of Maori Studies and Oceanic Linguistics というものであり、マオリ学とオセアニア言語学を兼任するものであった。まだ、マオリ学だけで、独り立ちできるというわけではなかった。Biggs 教授につづいて、1970年に、I. H. Kawharu 博士がマッセイ大学 (Massey

Univ.) の教授に就任した。この場合にも、その講座はマオリ学と社会人類学を兼任するものであった。

その後、数年間にわたって、半講座の形で、研究・教育がすすめられてきたが、1975年になって、状況は一変した。マオリ人学者の S. M. Mead 博士がウェリントン大学 (Victoria Univ. of Wellington) のマオリ学講座の教授に任命されたからである。この講座は、正真正銘のマオリ学の独立講座であった。これによって、マオリ学は、ニュージーランドの学界で正式に市民権を獲得したことになる。独立講座の新設にともない、今後はマオリ学の大学院コースも開設される予定であり、マオリ研究が独自の研究・教育プログラムを推進することが可能となった。この意味で、マオリ学の独立講座の新設は、将来への意義ある展開へのステップング・ストーンとなることが期待されている。

なお、上記のマオリ学の講座のほかに、マオリ学の研究機関として、マオリ研究センター (Centre for Maori Studies and Research) がワイカト大学 (Univ. of Waikato) に設置され、また Archive of Maori and Pacific Music がオークランド大学人類学科に附置されている。

## 2) *Maoritanga* の研究

ここでつぎに、視点をかえて、大学の制度のなかに地位を確立したマオリ学の学問体系について、少しふれておきたい。マオリ学とはいかなる学問かを一言で定義づけるならば、それは“*Maoritanga*”を研究する学問であるといえる。*Maoritanga* とは、“Maori-ness”とか、“Maori culture”とか、“Maori ideology”を意味している [SALMOND 1975: 1; REED 1963a: 112]。つまり、端的にいうならば、マオリ人をしてマオリ人たらしめているもの、もしくはマオリという一つの民族としてのアイデンティティーのあかしが、*Maoritanga* である。これをより具体的に定義したのが、Apirana Ngata である。彼は、*Maoritanga* を構成する要素として、つぎの8つをあげている [REED 1963a: 112]。つまり、(1) マオリ語、(2) 伝統的な詠唱歌、(3) 伝統的な格言、(4) 伝統的なおどり、(5) 装飾美術、(6) 伝統的な住居と集会所、(7) 集会所での儀礼、(8) マオリ人としての誇り、などである。

この *Maoritanga* という概念は、もちろん白人と接触以後に生れたものである。白人という異民族に接してはじめて、マオリ人は *Maoritanga* を自覚しはじめたのである。そして、この *Maoritanga* という概念をマオリ人のあいだで完全に定着させたのが、Ngata と Rangi Hiroa であった。彼らは、1920年代に、マオリ近代化運動をすすめる一方で、マオリの伝統文化の復興運動を展開した。このときに、運動のイデオロギーの中核を支えたのが、この *Maoritanga* という概念であった。Rangi Hiroa らは、*Maoritanga* を復興することによって、民族としてのアイデンティティーを確立することができると考え、*Maoritanga* の啓蒙につとめた。この意味で、マオリ学、

つまりマオリ人による *Maoritanga* の研究は、Rangi Hiroa らによって創始されたと考えることができる。

Rangi Hiroa らが創設した当時の初期のマオリ学は、一種の国学としての色彩が強かったようにおもわれる。なぜなら、Rangi Hiroa らは、白人との接触以後、一つの民族としてのアイデンティティー喪失状態にあったマオリを自己確立させるために、*Maoritanga* という概念を活用したからである。つまり、白人に対抗して、マオリという、一つの民族が自己確立するための手段として、*Maoritanga* が用いられたのである。このように考えてみると、初期のマオリ学は、一種の国学としての役割をになっていたということができる。

第二次大戦後に登場したマオリ研究の第四世代も、基本的には、Ngata と Rangi Hiroa が創始したマオリ学の伝統のもとにあった。それは、この第四世代に属する研究者たちが、Ngata の定義した、*Maoritanga* の8つの構成要素の研究を重点的におこなったことに如実に示されている。

しかし、この世代が、Rangi Hiroa らの世代と根本的にことなる点は、彼らのマオリ学には国学的要素が、完全に欠落していることである。彼らは、*Maoritanga* を研究することによって、マオリ人の自己確立に貢献しようとは考えていない。この世代の研究者は、イデオロギーを排して、できるかぎり客観的に *Maoritanga* をとらえようとした。つまり、マオリ学における、普遍的学問研究のスタイルを確立しようとしたのである。

### 3) 専門分化

第四世代のほとんどの研究者は、ニュージーランドの大学で学んだあと、英米に留学し、そこで主として人類学の博士号を取得している。その後、ニュージーランドに帰国し、人類学やマオリ学の講師となってマオリ研究に従事している。

この世代の一つの特徴は、マオリ研究における専門分化をすすめたことである。前の世代の研究者、たとえば Rangi Hiroa などは、まさにオールラウンド・プレーヤーとして、マオリ研究のいくつもの分野ですぐれた業績をのこしている。しかし、第四世代になると、それぞれの研究者が、自分の専門の分野に仕事を集中している。広く浅くから、狭く深くへと転換したのである。たとえば、B. Biggs はマオリ語と口承文芸の研究、I. H. Kawharu は社会組織と土地所有の研究、S. M. Mead は民族芸術の研究、P. W. Hohepa はマオリ語の研究、J. Metge はマオリの都市化の研究、M. Winiata はリーダーシップの研究、M. McLean は民族音楽の研究、D. R. Simmons は文化史、などである。

学問が発展すれば、専門分化がすすむのは自然の成行であり、この意味からすれば、マオリ学が一つの学問として、成熟してきた証拠となるものである。そして、専門分化がすすむにつれて、*Maoritanga* をより客観的、より抽象的に研究するようになっ

たのである。

なお、これらの第四世代の研究者の研究業績については、次章でくわしく紹介する予定である。

## 6. 第五世代

第4世代全盛の現在のマオリ研究のなかにあつて、第5世代の始動を示唆する、新しい試みが登場しはじめている。

たとえば、Michael King が編者となつてまとめた *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga* がある [KING (ed.) 1975]。*Te Ao Hurihuri* とは、直訳するならば「移りゆく世界」である。この本では、9人の若手のマオリ人学者が、移りゆく *Maoritanga* の諸相をいかにとらえるべきかについて論じている。この本の執筆者は、すべて若手のマオリ人研究者であり、ニュージーランドの大学でマオリ学を専攻し、現在は大学でマオリ学の講師などをつとめている。彼らは、第四世代に育てられたにもかかわらず、つぎの点で第四世代の研究者とはことなる問題意識をもっている。つまり、第四世代は、*Maoritanga* をマオリ学の研究対象として客観的視点からとらえたのに対して、彼らは *Maoritanga* は主観的視点からとらえるべきと主張する [KING (ed.) 1975: 218-219]。客観的かつ抽象的に分析された *Maoritanga* は、リアリティからほど遠いものがあり、主観的視点からのみ *Maoritanga* は了解可能であると、のべている [KING (ed.) 1975: 191]。

換言するならば、彼らは *Maoritanga* をただ単に学問研究の対象とするだけでなく、マオリ学の研究成果を現実のマオリ人の生活のなかに活かす道を求めているのである。このような問題意識の変化には、現代のマオリ人の過半数が先祖伝来の伝統の地を離れて、都市に居住しているという事実が影響をあたえている。都市という新しい環境のなかで、いかに *Maoritanga* を活かしてゆくか、ということが、現代のマオリ人にとって、重大関心事となっている。このような背景のなかで、彼らは現代における *Maoritanga* の意味を問うているわけである。しかし、それはまだ試論的展開にとどまっております、今後の本格的な展開を待つ必要がある。

このほか、Anne Salmond の著した *Hui: A Study of Maori Ceremonial Gatherings* も、いままでのマオリ研究にはない、新しい視点をもっている [SALMOND 1975]。*hui* とは、あらゆる種類の会合を意味しているが、とくに集会所における儀礼的会合を意味するものとして用いるのが一般的である [SALMOND 1975: 1]。彼女は、白人の文化に完全に同化したかにも見える、マオリ人がその *Maoritanga* を如実に表現する機会が *hui* であるという着想のもとに、*hui* でおこなわれる儀礼の分析をおこなっている。*hui* の分析を通じて、現代の *Maoritanga* にせまろうとしているのである。彼女は、このほかにも、*hui* でおこなわれる儀礼の言語社会学的分析も試みており

[SALMOND 1974], また *hui* における演説の分析を通じて、現代のマオリ人のあいだにおける政治についても論じている [SALMOND 1976]。

このほかにも、マオリ研究の新しい世代に属する研究者としては、H. Dansey, T. K. Dewes, T. S. Karetu, A. Mahuika, M. Marsden, J. Rangihau, D. Sinclair, J. Walker などがいる。彼らの研究動向については、次章で紹介する予定である。

いずれにしても、この新しい世代は、いまやっとその始動をはじめたばかりであり、大学におけるマオリ学の独立講座の新設とあいまって、今後の展開に期待したい。

### Ⅲ. テーマ別研究動向

この章では、いままでに公にされた、マオリ研究の多くの業績のうち、とくに民族学関係のものを選び、テーマ別に分類して、最近の研究動向として紹介する。なお、ここでは主として、1960年以降の文献を重点的にとりあげたので、それ以前の文献については、C. R. H. Taylor の集成した文献目録 [TAYLOR 1965] を参照いただきたい。

#### 1. マオリ文化一般

マオリ文化の全般的なことを概説した最初の労作は、E. Best の *The Maori* と *The Maori As He Was* である [BEST 1924b, 1924c]。前者は、マオリ文化のあらゆる局面を包括的に記述しており、後者は、とくに社会組織に重点をおいて記述がなされている。

ついで、Rangi Hiroa の *The Coming of Maori* がある [RANGI HIROA 1949]。この本は、現在われわれが手にしうる、最上のマオリ文化の概説書である。全体が四部に分かれ、まずはじめにマオリ人の民族移動についてのべられ、その後、物質文化、社会組織、宗教に関して、細目にわたって記述されている。この本を一冊読めば、マオリ文化の全体像を容易につかみとることができるしくみになっている。1949年に初版がでて以来、現在までに8版が重ねられており、マオリ文化に関する書物としては、もっともロングセラーである。マオリ人学者にして、はじめてこのような仕事が可能となったものとおもわれる。このほか、マオリ文化をポリネシア文化との関連のなかでとらえようとした論文として、Beaglehole [1940] がある。

I. L. G. Sutherland の編集による、*The Maori People Today* は、1930年代における、マオリ文化の全般的な動向を、10数人の学者がテーマを分担して論じている [SUTHERLAND 1940]。それから約30年後に、今度は E. G. Schwimmer が編者となって、1960年代のマオリ文化の動向が論じられている [SCHWIMMER 1968]。この2冊の本を積みくらべてみると、30年間のあいだにおける、マオリの文化と社会の変化を読みとることができる。同様に、政治学者の J. G. A. Pocock の編集による *The*

*Maori and New Zealand Politics* は、マオリ人がニュージーランドの政治とどのようなかわりをもったかについて、歴史学者、政治学者、社会学者、人類学者、心理学者ら8人によって論じられている [POCOCK 1965]。

このほか、アメリカの心理学者 D. Ausubel が、マオリ人の民族性について、国民性研究と同じ視点から論じている [AUSUBEL 1960]。また、人類学者の E. G. Schwimmer と Joan Metge はそれぞれマオリ文化の入門書を世に送りだしている [SCHWIMMER 1966; METGE 1967]。このうち、前者は、より一般読者向きであり、後者は、人類学専攻学生向けに書かれている。

## 2. 社会組織

マオリの伝統的社會組織を論じたものとしては、R. Firth の *Primitive Economics of the New Zealand Maori* がもっとも体系的に分析されたものである [FIRTH 1929, 1959]。現在では、マオリの社会と文化に関する古典の一つとみなされているが、いまでもまだ第一級の業績としての価値がそこなわれていないようにおもわれる。

土地所有に関しては、I. H. Kawharu の仕事がかもっとも重要である [KAWHARU 1963, 1971]。このほか、N. Smith が、白人の土地法がマオリの伝統的な土地所有制に与えた影響をくわしく論じている [N. SMITH 1942, 1960]。土地との関わりでいえば、マオリの部族戦争の問題がある。この問題については、早くから幾人かの研究者が論文を書いている [GUDGEON 1907; S. P. SMITH 1910]。しかし、現代の人類学における戦争分析の成果をとりいれて、マオリの部族戦争を分析しなおしたのが、A. P. Vayda の *Maori Warfare* である [VAYDA 1960a]。彼は、最近、生態学的展望のもとで、マオリの部族戦争をとらえなおすことを試みている [VAYDA 1976]。

このほか、マオリの伝統社会を論じた仕事としては、つぎのようなものがある。M. Winiata [1956, 1967] はリーダーシップの問題、B. Biggs [1960] は結婚の歴史的分析、B. Heuer [1972] はマオリの女性の社会的役割の分析、Joan Metge [1957, 1964b] は現代のマオリの結婚の問題と任意集団の問題、などいくつかの興味ある業績が発表されている。

とくに最近においては、英米で高度に発展した親族理論をもとにして、マオリの社会組織を再分析する試みがいくつかあらわれている [SCHEFFLER 1964; WEBSTER 1973, 1975]。しかし、まだ十分に展開されたとはいえず、今後より一層、この方面で仕事がなされるべきとおもわれる。

## 3. 民族宗教

マオリの民族宗教の研究は、早くから着手され、いくつかのすぐれた著書や論文が発表されている。なかでもとくに、E. Shortland [1856, 1882]、W. E. Gudgeon

[1905a, 1905b, 1907], E. Best [1922a, 1924a, 1922b], J. C. Andersen [1940] などが重要である。しかし、これらの仕事のほとんどすべてが民族宗教の記述だけにおわっており、それを体系的に分析することはおこなわれなかった。しかし、白人との接触によってキリスト教がもちこまれ、その影響のもとで民族宗教が崩れゆくなかで、これらの仕事がおこなわれており、その意味では後世に貴重な資料をのこしたといえる。

これらの蓄積された資料の分析に着手したのは、デンマーク人学者の J. D. Johansen であった。彼は、資料の体系的な分析を通じて、2冊の大著をものにしていく [JOHANSEN 1954, 1958]。彼の仕事は現在でも高く評価されている。このほか、G. Blake-Palmer [1954] が呪術の分析、D. K. Turner [1963] が葬式の分析、E. G. Schwimmer [1963] が守護霊の分析などをおこなっている。また、マオリ人の死生観に関しては、その伝統的な側面について、R. S. Oppenheim [1973] がくわしく分析しており、白人と接触後の死生観の変化については Beaglehole 夫妻 [E. & P. BEAGLEHOLE 1945] が論文にまとめている。最新の業績としては、Jean Smith によるタブーの分析がある [J. SMITH 1974]。彼女の仕事は、タブーの分析を通じて、マオリの伝統的な社会構造を理解することにあり、そのかぎりでは高く評価できる。マオリの世界観は、いくつかの中心概念を核として構成されており、Smith のように、タブーというマオリの世界観の中心概念の一つの分析をもとにして、マオリ文化の構造分析をおこなう方法は有効である。

つぎに、神話の問題があるが、これについても、古くから研究がすすめられている。初期の仕事としては、G. Grey [1855] と E. Best [1924a] のものが重要である。その後の業績としては、D. R. Simmons [1963, 1969, 1971] の一連の仕事、A. Alpers [1964], R. J. Walker [1969] などがある。これらは、主として神話の分析を通じて、マオリの民族移動の問題を論じている。

このほか、H. D. Skinner は彫刻物にあらわれた動物と神話にあらわれる動物の相関について、たくみな分析をおこなっている [SKINNER 1964]。また、マオリ神話の構造分析をはじめておこなったのは、M. Jackson [1968] である。しかし残念ながら、あまり成功したとはいえない。マオリの神話については、上記以外にもぼう大な量の蓄積があり、もう少し説得性に富む分析がおこなわれてしかるべきとおもう。神話の構造分析は、今後に残された課題の一つである。

#### 4. 民族芸術

マオリは、ポリネシア民族のなかで、もっとも豊かな芸術をはぐくんできた民族の一つである。とくに、その木彫技巧は有名である。マオリの木彫に関する初期の仕事としては、A. Hamilton のものが重要である [HAMILTON 1896, 1901]。その後、H. D.

Skinner [1924] や T. T. Burrow の一連の研究 [1959, 1964, 1967, 1969], S. M. Mead の研究 [1961] などがある。また、木彫がほどこされた建築物の研究は、W. J. Phillipps が精力的におこなっている [PHILLIPPS 1954, 1952, 1955]。このほか、織りもの関係については、Te Rangi Hiroa [1926a, 1926b], W. J. Phillipps [1943], D. R. Simmons [1968], S. M. Mead [1968, 1969a] などの研究がある。

ウェリントン大学のマオリ学教授であり、マオリ芸術研究の第一人者である S. M. Mead は、1975年に、“The Origins of Maori Art: Polynesian or Chinese?” と題する重要な論文を発表した [MEAD 1975]。彼はその論文のなかで、マオリの民族芸術——つまり、木彫、編みもの、いれずみなど——は中国文明をその起源とするという意見 [FRASER 1968] に対して、異議をとнаえ、起源地は東部ポリネシアであると、明確に論じている。今後このマオリの民族芸術の起源の問題は多くの論議をよびそうである。しかしいずれにしても、マオリの民族芸術の研究は、今後も Mead 教授を中心にして精力的にすすめられてゆくとおもわれる。そして、この分野はマオリ研究のなかで、もっとも実り豊かな分野の一つである。

つぎに、マオリの民族音楽についてであるが、この分野の仕事は初期の研究者のあいだではあまりおこなわれていなかった。例外的に、E. Best [1908] や J. C. Anderson [1934] をみるだけである。この分野でいま最前線で仕事をすすめているのは、M. Mclean である。彼は、マオリの詠唱歌を分析して、オタゴ大学から博士号をとり [McLEAN 1965]、現在はオークランド大学の Archive of Maori and Polynesian Music の Director として精力的に仕事をすすめている [McLEAN 1964a, 1964b, 1969]。また、S. M. Mead は、マオリの詠唱歌におけるシンボリズムの分析をおこなっている [MEAD 1969b]。この分野では、今後マオリの民族音楽と他のポリネシアの民族音楽との比較研究などをすすめることによって、民族移動の問題に貢献があるものとおもわれる。その意味で、1970年に設立された Archive では、現在のところ、ポリネシア各地の民族音楽の資料が集積されており、その分析が待たれるところである。

## 5. 言語文化

マオリ語の言語学的研究としては、B. Biggs がもっとも体系的に分析をおこなっている [BIGGS 1961, 1968]。そして、とくに文法構造については、P. W. Hohepa の著書がすぐれている [HOHEPA 1967]。マオリ語の辞書としては、W. Williams が編集した1844年版の *A. Dictionary of the Maori Language* がもっとも古いものである [W. WILLIAMS 1844]。この辞書は、これまでに編者をかえて、七度にわたって改訂がおこなわれている [H. W. WILLIAMS 1971]。また、マオリ語辞典のコンサイス版が、Biggs によって編まれている [BIGGS 1966]。

マオリの口承文芸に関する一般的記述は、A. W. Reed [1963b] と B. Biggs [1964] にくわしい。また、マオリの伝統的な詩については、Mitalcfe [1974] がもっとも広範に論じており、ほかにもいくつかの分析がある [Curnow & Oppenheim 1960]。また、マオリ人の若手の研究者である Te Kapunga Dewes は、マオリの伝統的な踊りの際にうたわれる詩の分析をおこなっている [DEWES 1972]。このほか、マオリの社会生活においては、格言が重要な役割を果たしており、これの研究も古くからおこなわれている [FIRTH 1926c]。最近では、Reweti Kohere [1951] や A. E. Brougham と A. W. Reed [1963] などによって、新しい視点から論じられている。なお、民話の研究としては、M. Orbell [1968] などがある。

このほか、M. Jackson は、無文字の民族であったマオリが白人と接触後、マオリ語が文字化されたことともなう社会変化を、歴史的に研究し、論文にまとめている [JACKSON 1967]。しかし、これは修士論文としてまとめられたものであり、着想の新鮮さの割には、まだ十分に論じきれていない。

## 6. コミュニティー研究

マオリの社会と文化の研究にフィールド・ワークの手法を最初に導入したのは、F. M. Keesing であった。彼は フィールド・ワークによって、マオリの一つのムラにおける文化変容の諸相を研究した [KEESING 1928a]。

彼が文化変容の問題をとりあげて以後、多くの学者がこのテーマに集中した。J. Cowan [1930], H. W. Williams [1935], H. B. Hawthorn [1944], E. Beaglehole 夫妻 [1946], J. M. McEwen [1947], K. B. Cumberland [1949], M. Winiata [1953], T. K. Fitzgerald [1974] らは、マオリの文化変容の問題を全般的に論じている。このうちとくに、E. Beaglehole 夫妻の著書 *Some Modern Maori* の評価がもっとも高い。また、W. S. Dale [1931] はマオリが白人に同化してゆくプロセスについて言及している。このほか、H. Belshaw [1939] と R. S. Merrill [1954] は、とくに文化変容がマオリ人の経済活動に及ぼした影響を研究している。そして E. G. Schwimmer は、文化変容が人間の知覚にどのような変化を与えるかについて、マオリのケースを中心に論じている [SCHWIMMER 1965b]。なお、KEESING は自らの最初の調査地を30年後に再びおとずれ、その間における文化変容に関して小論をまとめている [KEESING 1962]。

Keesing が導入した、フィールド・ワークによるマオリのコミュニティの研究は、戦後開花した。多くのコミュニティ研究のうち、本にまとめられたものとしては、P. W. Hohepa [1964], M. Winiata [1967], I. H. Kawharu [1975] などがある。そのほか、論文の形でまとめられたものとして、J. Booth [1959], E. Schwimmer [1965a], James Ritchie [1965], A. C. Bhagabiti [1967] などがある。

これらのコミュニティ研究においては、コミュニティにおける親族を中心とした社会関係の分析に重点をおくものが圧倒的に多い。親族関係の分析に焦点を合わせた研究は、たいへんオーソドックスなものではあるが、それだけでおわるならば、あまり実り多いものとはならない。もっと新たな視点を導入する必要がある。残念ながら、いままでのところ、親族を中心とした社会関係の分析を超える試みはなされていない。

## 7. Rakau Studies

マオリのコミュニティの研究における、もっとも包括的かつ組織的な調査は、Rakau Studies とよばれるプロジェクトである。このプロジェクトは、ウェリントン大学の心理学教授 E. Beaglehole を中心におこなわれたものである。Beaglehole らは、Rakau とよばれるマオリのコミュニティを、1950年のはじめから約10年ほど継続して調査をおこない、つぎつぎと報告書を出版した。このプロジェクトの概要は、Beaglehole と James Ritchie [1958] によってまとめられており、それに対する批判もおこなわれている [METGE & CAMPBELL 1958]。

このプロジェクトは、心理学者が中心となっておこなわれたものである。そのため、マオリのパーソナリティの研究 [James RITCHIE 1956a]、思春期の研究 [MULLIGAN 1957]、幼児期の研究 [Jane RITCHIE 1957]、子供の生活の研究 [EARLE 1958]、ライフ・サイクルの研究 [James RITCHIE 1963]、家族関係の研究 [Jane RITCHIE 1964] などのように、心理学的調査・研究が主としておこなわれた。けれども、マオリの一つのコミュニティをこれほど長期間にわたって調査したケースはほかになく、この点でマオリ研究に貢献したといえる。

この Rakau Studies との関わりからいえば、マオリの教育の問題についても、いままでに多くの研究がおこなわれている。いままでにおこなわれた研究のうち、主なものを列挙すれば、つぎのごとくになる。H. C. McQueen [1945]、R. Piddington [1952]、E. W. Parsonage [1956]、James Ritchie [1956b]、D. P. Ausubel [1965]、T. K. Fitzgerald [1972]、G. McDonald [1973]、J. M. Barington と T. H. Beaglehole [1974] などがある。これらの研究のうち、多くのものは、実態調査にもとづくものであり、人類学的にも価値がある。マオリの教育に関する調査・研究がよくおこなわれるのは、New Zealand Council for Educational Research が調査資金を授与するからであり、人類学者も、この Council から調査費をもらって研究をおこなっている [KAWHARU 1975]。

## 8. Urban Maoris

第二次大戦後における、マオリ人の社会生活における一つの大きな変化は、農村から都市への社会的移動の増加である。とくに、ニュージーランド最大の都市オークラ

ンドへの移住が激増した。この変化に一番最初に着目して、マオリの都市化の研究をはじめたのが、Joan Metge である。彼女は、1953年から54年にかけて、オークランド市に居住するマオリ人のあいだでフィールド・ワークをおこない、その結果をまとめて、*A New Maori Migration: Rural and Urban Relations in Northern New Zealand* と題して出版している [METGE 1964a]。都市居住マオリ人に関する最初の労作である。

その後、1960年代に入ると、マオリ人の都市への流入がより激しくなり、それに応じて、都市居住マオリ人の研究も盛んになった。1960年代になされた研究としては、James Ritchie [1964], I. H. Kawharu [1968] などがある。1970年代になると、若手の研究者の多くが、都市居住マオリ人の研究に従事するようになった。その筆頭は、*Maori in a Metropolis: the Social Adjustment of the Maori to Urban Living in Auckland* という論文で、オークランド大学から博士号（社会人類学）を取得した R. J. Walker である。このほか、若手の研究者による業績としては、P. H. DeBres [1970], D. T. Rowland [1971, 1972], H. M. Gillespie [1973], A. P. Trlin [1973, 1974] などがある。

これらの都市居住マオリ人に関する研究の多くは、もともと農村部に住んでいたマオリ人が、都市的環境にいかに対応しているか、ということをも、主テーマとして研究をおこなっている。そのほか、都市という、まったく新しい環境のなかで、マオリの伝統的な社会制度がどの程度維持されているかとか、都市における社会関係のあり方とか、任意集団がいかに関能しているか、といったような問題が、フィールド・ワークをもとにして研究されている。今後のマオリ研究において、この都市居住マオリ人の研究はもっとも実り多い分野であるとおもわれる。そして、都市生活のなかにおけるマオリの伝統文化の研究が、その中核を占めるようにおもわれる。

蛇足になるが、オークランド市は、現在世界でもっとも多数のポリネシア人が居住する都市として有名である。サモア、トンガ、クック、ニウエ、トケラオをはじめとする、ポリネシアの島々から、多くのポリネシア人が職を求めて、オークランド市に移住してきている。そのため、オークランド市に居住する、ポリネシアの各島の島民の研究が、多くの学者によっておこなわれている。たとえば、オークランド市に居住するサモア人コミュニティの研究としては、A. J. C. Macpherson [1970], D. Pitt と A. J. C. Macpherson [1971, 1974], A. D. Trlin [1975] などがある。また、クック諸島からの移民については、A. Hooper [1961] や P. H. Curson [1970a] の研究があり、ニウエ島からの移民の研究としては、A. C. Walsh と A. D. Trlin のものがある [WALSH & TRLIN 1973]。このほか、トケラオ諸島からの移民についても調査が現在進行中であるが、まだ、研究成果は発表されていない。なお、オークランド市におけるポリネシア島民の居住分布については、P. H. Curson [1970] が要

頗よくまとめている。

## 9. そ の 他

マオリ人は、白人と文化接触後、白人の支配に抵抗する形でいくつかの土着主義運動を組織したことで有名である。それらのうちの多くは、天啓をうけた予言者に指導された宗教運動である場合が多い。パパフリヒア運動がその最初のものであり [WILSON 1965; PARR 1969], その後ハウハウ運動 [BAGGAGE 1937; WINKS 1953], リンガツ運動 [GREENWOOD 1942; MISUR 1971], ラタナ運動 [HENDERSON 1965, 1972] などが相次いでおこっている。そして、これらのマオリにおける予言者運動を比較研究する試みもある [LYONS 1970; 石森 1974]。

マオリにおける土着主義運動は、予言者による宗教運動だけに限定されるものでは決してない。むしろ、政治運動としての色彩の強いものもある。たとえば、マオリ王国運動などは、マオリ・ナショナリズムに支えられた土着主義運動である。この運動については、第一次資料が比較的ととのっているにもかかわらず [GORST 1864; KERRY-NICHOLLS 1884], 人類学的視点からの研究は皆無である。土着主義運動という集合行動がいかなるメカニズムによって可能となったかについて、もっと研究をすすめる必要がある。マオリ人がおこした、いくつかの土着主義運動については、その点資料が比較的ととのっているので、もっと新たな視点からの分析が可能のようにおもわれる。このほか、マオリ人と白人とのあいだにおける人種関係の問題がある。ニュージーランドにおける人種関係を論じたものとしては、J. Harre [1962, 1965] の仕事をもっとも重要である。また、Harre [1966] は、マオリ人と白人のあいだにおける異民族間結婚をたくみに分析している [HARRE 1966]。また、James Ritchie は、ニュージーランドの6つのコミュニティーを選んで、そこにおける人種関係を比較研究している [James RITCHIE 1964]。

## 文 献

下記の雑誌は略号で表記する。

*Dominion Museum Bulletin (D.M.B.)*

*Dominion Museum Monograph (D.M.Mon.)*

*Journal of the Polynesian Society (J.P.S.)*

*Polynesian Society Memoir (P.S.M.)*

*Transactions of the New Zealand Institute (T.N.Z.I.)*

ALPERS, A.

1964 *Maori Myths and Tribal Legends*. Blackwood & Janet Paul.

ANDERSEN, J. C.

1934 *Maori Music with its Polynesia Background*. P.S.M. No. 10.

- 1940 Maori Religion. *J.P.S.* 49(4): 513-555.
- ARCHER, Dane and Mary  
1970 Race, Identity and the Maori People. *J.P.S.* 79(2): 201-218.
- AUSUBEL, D.  
1960 *The Fern and the Tiki*. Angus and Robertson.  
1965 *Maori Youth*. Holt, Rinehart & Winston.
- BAGGAGE, S. Barton  
1937 *Hou Houism: An Episode in the Maori Wars*. A. H. & A. W. Reed.
- BANNISTER, Saxe  
1838 Account of the Change and Present Condition of the Population of the New Zealand. *Journal of Statistical Society* 1: 362-376.
- BARRINGTON, J. M. & T. H. BEAGLEHOLE  
1974 *Maori Schools in a Changing Society: A Historical Review*. N.Z. Council for Educational Research.
- BARROW, T. T.  
1959 Free-standing Maori Images. In J. D. Freeman & W. R. Geddes (ed.) *Anthropology in the South Seas*, Thomas Avery & Sons Ltd. pp. 111-120.  
1964 *The Decorative Arts of the New Zealand Maori*. A. H. & A. W. Reed.  
1969 *Maori Wood Sculpture of New Zealand*. A. H. & A. W. Reed.  
1967 *The Life and Work of the Maori Carver*. N.Z. Dept. of Education.
- BEAGLEHOLE, Ernest  
1937 New Zealand Anthropology Today. *J.P.S.* 46(2): 154-172.  
1940 The Polynesian Maori. *J.P.S.* 49(1): 39-68.
- BEAGLEHOLE, E. & P.  
1945 Contemporary Maori Death Customs. *J.P.S.* 54(1): 91-116.  
1946 *Some Modern Maori*. N.Z. Council for Educational Research.
- BEAGLEHOLE, E. & James RITCHIE  
1958 The Rakau Maori Studies. *J.P.S.* 67(1): 132-154.
- BELSHAW, Horace  
1939 The Maori People, One Hundred Years After. *Economic Record* 15: 95-109.
- BEST, Elsdon  
1897 Tuhoe-land: Notes on the Origin, Customs, etc., of the Tuhoe or Urewera Tribe. *T.N.Z.I.* 30: 33-41.  
1898a The Art of the Whare Pora: Notes on the Clothing of the Ancient Maori. *T.N.Z.I.* 31: 625-658.  
1898b Omens and Superstitious Beliefs of the Maori. *J.P.S.* 7(2): 119-136, 7(4): 233-243.  
1900 Spiritual Concepts of the Maori, I. *J.P.S.* 9(2): 173-199.  
1901a Spitual Concepts of the Maori, II. *J.P.S.* 10(1): 1-20.  
1901b Maori Magic. *T.N.Z.I.* 34: 69-98.  
1901c Land of Tara. *J.P.S.* 10: 107-165.  
1902a Food Products of Tuhoeland. *T.N.Z.I.* 35: 45-111.  
1902b Maori Nomenclature. *Journal of Royal Anthropological Institute* 32: 182-201.  
1903 Maori Marriage Custom. *T.N.Z.I.* 36: 14-67.  
1904 Notes on the Custom of Rahui. *J.P.S.* 13(1): 83-88.  
1905 Maori Eschatology. *T.N.Z.I.* 38: 148-239.  
1907 Maori Forest Lore, I. *T.N.Z.I.* 40: 185-254.  
1908a Maori Songs. *N.Z. Official Year-Book* 1908: 739-746.  
1908b Maori Forest Lore, II. *T.N.Z.I.* 41: 231-286.  
1909 Maori Forest Lore, III. *T.N.Z.I.* 42: 433-481.  
1912 The Stone Implements of the Maori. *D.M.B.* No. 4 (reprinted in 1974).  
1914 Ceremonial Performances Pertaining to Birth. *Journal of Royal Anthropological Institute*

- 44: 127-162.
- 1916 Maori Storehouses and Kindred Structures. *D.M.B.*, No. 5 (reprinted in 1974)
- 1922a *Some Aspects of Maori Myth and Religion.* *D.M.Mon.*, No. 1.
- 1922b *Spiritual and Mental Concepts of the Maori.* *D.M.Mon.*, No. 2 (reprinted in 1973).
- 1922c *The Astronomical Knowledge of the Maori.* *D.M.Mon.*, No. 3.
- 1922d *The Maori Division of Time.* *D.M.Mon.*, No. 4.
- 1923a *Polynesian Voyagers.* *D.M.Mon.*, No. 5.
- 1923b *The Maori School of Learning.* *D.M.Mon.*, No. 6.
- 1924a Maori Mythology and Religion. *D.M.B.*, No. 6.
- 1924b *The Maori*, 2 Vols. *P.S.M.*, No. 5.
- 1924c *The Maori As He Was.* R. E. Owen, Government Printer (reprinted in 1974).
- 1925a *Tuhoe, the Children of the Mist*, 2 Vols. *P.S.M.*, No. 6 (reprinted in 1972).
- 1925b *The Maori Canoe.* *D.M.B.*, No. 7.
- 1925c *Maori Agriculture.* *D.M.B.*, No. 9.
- 1927 *The Pa Maori.* *D.M.B.*, No. 10 (reprinted in 1973).
- 1929 *The Whare Kohanga and its Lore.* *D.M.B.*, No. 13 (reprinted in 1975).
- BHAGABATI, A. C.
- 1967 *Social Relation in a Northland Maori Community.* Unpublished Ph.D. Thesis. Dept. of Anthropology, Univ. of Auckland.
- BIGGS, Bruce G.
- 1960 *Maori Marriage.* Maori Monographs No. 1, The Polynesian Society.
- 1961 *The Structure of New Zealand Maori.* *Achieves of the Languages of the World*, Indiana Univ.
- 1964 *The Oral Literature of the Polynesians.* *Te Ao Hou*, pp. 23-25, pp. 42-47.
- 1966 *English-Maori Dictionary.* A. H. & A. W. Reed.
- 1968 *The Maori Language: Past and Present.* In E. Schwimmer (ed.), *The Maori People in the Nineteen-Sixties.* Blackwood & Janet Paul.
- BLAKE-PALMER, G.
- 1954 *Tuhungaim and Makutu.* *J.P.S.* 63(2): 147-163.
- BOOTH, John
- 1959 *A Modern Maori Community.* In J. D. Freeman & W. R. Gedds(ed.), *Anthropology in the South Seas*, Thomas Avery & Sons Ltd. pp. 235-246.
- BROUGHAM, A. E. & A. W. REED
- 1880 *Contributions Towards a Better Knowledge of the Maori Race.* *T.N.Z.I.* 13: 57-84.
- COLENZO, W.
- 1888 *Fifty Years Ago in New Zealand.* Harding.
- CONDLIFFE, J. B.
- 1971 *Te Rangi Hiroa.* Whitcombe & Tombs Ltd.
- COOK, James
- 1784 *A Voyage to the Pacific Ocean.* 3 Vols. Nicol & Cadell.
- COWAN, James
- 1930 *The Maori Yesterday and Today.* Wellington.
- CRAIK, G. L.
- 1830 *The New Zealanders.* Charles Knight.
- CRUISE, R.
- 1823 *Journal of a Ten Months Residence in New Zealand.* Longmans (reprinted in 1957).
- CUMBERLAND, K. B.
- 1949 *Aotearoa Maori: New Zealand About 1780.* *Geographical Review* 39(3): 401-424.
- 1950 *A Land Despoiled: New Zealand About 1853.* *New Zealand Geographer* 6: 13-34.
- CURNOW, A. & R. OPPENHEIM
- 1960 *Maori Poetry.* In A. Curnow (ed.), *The Penguin Book of New Zealand Verse.* Penguin

Books.

- CURSON, P. H.  
 1970a Cook Islanders in New Zealand. In K. Thompson & A. Trlin (ed.), *Immigrants in New Zealand*. Massey Univ. Press.  
 1970b Polynesians and Residential Concentration in Auckland. *J.P.S.* 79(4): 421-432.
- DALE, W. S.  
 1931 The Maori: A Problem in Assimilation. *Australian Journal of Psychology and Philosophy* 9: 203-213.
- DALTON, B. J.  
 1967 *War and Politics in New Zealand, 1855-1870*. Sydney Univ. Press.
- DANSEY, H.  
 1975 A View of Death. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspect of Maoritanga*, Hicks, Smith & Sons Ltd., pp. 173-190.
- DE BRES, P. H.  
 1970 *Religion in Atene: Religious Assosiations and the Urban Maori*. P.S.M., No. 37.
- DEWES, Kapunga  
 1972 *Nga Waiata Haka a Henare Waitoa o Ngati Porou*. M.A. Thesis, Dept. of Anthropology and Maori Studies, Massey Univ.  
 1975 The Case for Oral Arts. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*, Hicks, Smith & Sons Ltd., pp. 55-85.
- DIEFFENBACH, E.  
 1844 *Travels in New Zealand*. 2 Vols. Murray.
- DUFF, Roger  
 1956 *The Moa Hunter Period of Maori Culture*. Government Printer.
- EARLE, Augustus  
 1832 *A Narrative of a Nine Months Residence in New Zealand*. Longman.
- EARLE, Margaret  
 1958 *Rakau Children*. Publications in Psychology No. 11, Victoria Univ. of Wellington.
- FALLA, R. A.  
 1973 Forward to New Edition of *Spiritual and Mental Concepts of the Maori* by Elsdon Best. *D.M.Mon.*, No. 10 (reprint edition).
- FIRTH, R.  
 1922 *The Kauri Gum Industry*. Unpublished M.A. Thesis, Univ. of New Zealand.  
 1925a The Korekore Pa: An Ancient Maori Fortress. *J.P.S.* 34(1): 1-18.  
 1925b The Maori Carver. *J.P.S.* 34(3): 277-291.  
 1925c Birth-control Among the N.Z. Maori. *Nature* 116: 747-748.  
 1926a Wharepuni: A Few Remaining Maori Dwellings of the Old Style. *Man* 26: 54-59.  
 1926b Some Features of Primitive Industry. *Economic Journal* 1: 13-22.  
 1926c Proverbs in Native Life. *Folklore* 37(2.3).  
 1927 The Maori Hill-fort. *Antiquity* 1: 66-78.  
 1929 *Primitive Economics of the New Zealand Maori*. Routledge.  
 1959 *Economics of the New Zealand Maori*. R. E. Own, Government Printer.
- FITZGERALD, T. K.  
 1972 Education and Identity: A Reconstruction of Some Models of Acculturation and Identity. *N.Z. Journal of Educational Studies* 7(1): 45-58.  
 1974 Maori Acculturation: Evolution of Choice in a Post-Colonial Situation. *Oceania* 44(3): 210-215.
- GILLESPIE, H. M.  
 1973 *An Investigation into the Adaptive Techniques Employed by Rural Maori Youth for Coping with Urban Life.*, Unpublished M.A. Thesis, Univ. of Auckland.
- GREY, George

- 1955 *Polynesian Mythology and Maori Legends*. Murray.
- GORST, John  
1864 *The Maori King*. Macmillan.
- GREENWOOD, William  
1942 *The Upraised Hand*. *J.P.S.* 51(1): 1-81.
- GUDGEON, W. E.  
1905a *Mana Tangata*. *J.P.S.* 14(1): 49-66.  
1905b *Maori Religion*. *J.P.S.* 14(2): 107-130.
- GUDGEON, C. M. G.  
1907a *Maori Wars*. *J.P.S.* 16(1): 13-42.  
1907b *The Tohunga Maori*. *J.P.S.* 16(1): 63-91.
- HAMILTON, A.  
1896 *The Art Workmanship of the Maori Race in New Zealand*. New Zealand Institute.  
1901 *Maori Art*. Ferguson & Mitchell.
- HARRE, John  
1962 *A Case of Racial Discrimination in New Zealand*. *J.P.S.* 71(2): 257-260.  
1965 *The Relevance of Ancestry as a Factor in Social and Cultural Choice*. *J.P.S.* 74(1): 3-20.  
1966 *Maori and Pakeha: A Study of Mixed Marriages in New Zealand*. Institute of Race Relations and Reed.
- HAWTHORN, H. B.  
1944 *The Maori: A Study in Acculturation*. American Anthropological Association Memoir 46.  
1945 *The Maori Looks to the Future*. *Far Eastern Survey* 14: 44-48.  
1949 *Administration and Primitive Economy in the New Zealand*. *Canadian Journal of Economic and Political Science* 16: 87-96.
- HENDERSON, J. McLeod  
1965 *The Ratana Movement*. In J.G.A. Pocock (ed.), *The Maori and New Zealand Politics*, Blackwood & Janet Poul. pp. 61-71.  
1972 *Ratana: The Man, the Church, the Political Movement* (second edition). A. H. & A. W. Reed.
- HEVER, Berys  
1972 *Maori Women*. A. H. & A. W. Reed.
- HOHEPA, P. W.  
1964 *A Maori Community in Northland*. Anthropology Dept. Bulletin No. 1, Univ. of Auckland, (reprinted in 1974).  
1967 *A Profile-Generative Grammar of Maori*. Indiana Univ. Publications in Anthropology and Linguistics, Memoir 20.
- HOOPER, A.  
1961 *Cook Islanders in Auckland*. *J.P.S.* 70(2): 147-193.
- 石森 秀三  
1973 「フェリックス・キーピング——その生涯と業績——」『季刊人類学』4(1): 168-197.  
1974 「ニュージーランド・マオリとキリスト教——民族宗教の衰微とキリスト教の土着化——」『人文学報』(京都大学人文科学研究所) 38: 41-61.
- JACKSON, M.  
1967 *Literacy, Communication and Social Change: the Maori Case 1830-1870*. M.A. Thesis, Dept. of Anthropology, Univ. of Auckland.  
1968 *Some Structural Considerations of Maori Myth*. *J.P.S.* 77(2): 147-162.
- JOHANSEN, J. Prytz  
1958 *Studies in Maori Rites and Myths*. Ejinar Munksgaard.  
1954 *The Maori and his Religion in its Non-Ritualistic Aspects*. Ejinar Munksgaard.

- KARETU, S.  
 1975 Language and Protocol of the Maori. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspect of Maoritanga*, Hicks, Smith & Sons Ltd. pp. 35-54.
- KAWHARU, I. H.  
 1963 *Maori Land Tenure*. Unpublished D. Phil Thesis, Univ. of Oxford.  
 1968 Urban Immigrants and Tangata Whanua. In E. G. Schwimmer (ed.), *The Maori People in the Nineteen Sixties*. Blackwood & Janet Paul.  
 1971 New Zealand: Salvaging the Remnant. In R. Crocombe (ed.), *Land Tenure in the Pacific*. Oxford Univ. Press.  
 1975 *Orakei: A Ngati Whatua Community*. N.Z. Council for Educational Research.
- KESING, F. M.  
 1928a *The Changing Maori*. Board of the Maori Ethnological Research Memoir Vol. 4.  
 1928b The Maoris of New Zealand: An Experiment in Racial Adaptation. *Pacific Affairs* 1: 1-5.  
 1929 Maori Progress on the East Coast. *Te Wananga* (Journal of the Board of Maori Ethnological Research) 1: 10-56, 92-127.  
 1962 Aftermath of Renaissance: Restudy of a Maori Tribe. *Human Organization* 21(1): 3-9.
- KERRY-NICHOLLS, J. H.  
 1884 *The King Country*. Sampson Low, Marston, Searle & Rwington.
- KING, Michael (ed.)  
 1975 *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks Smith & Sons Ltd.
- KOHERE, Reweti  
 1951 *He Konae Aronui: Maori Proverbs and Sayings*. A. H. & A. W. Reed.
- LYONS, D. P.  
 1970 *An Analysis to Three Maori Prophetic Movements*. Unpublished M.A. Thesis, Dept. of Anthropology, Univ. of Auckland.
- MCDONALD, G.  
 1973 *Maori Mothers and Pre-school Education*. N.Z. Council for Educational Research.
- MC EWEN, J. M.  
 1947 The Development of Maori Culture Since the Advent of the Pakeha. *J.P.S.* 54(2): 173-187.
- MCLEAN, Mervyn  
 1964a A Preliminary Analysis of 87 Maori Chants. *Ethnomusicology* 8: 41-48.  
 1964b The Music of Maori Chant. *Te Ao Hou* 47: 36-39.  
 1965 *Maori Chant*. Unpublished Ph.D Thesis, Univ. of Otago.  
 1969 Song Types of the New Zealand Maori. *Studies in Music* 3: 53-69.
- MCQUEEN, H. C.  
 1945 *Vocations for Maori Youth*. N.Z. Council for Educational Research.
- MACPHERSON, A. J. C.  
 1970 *Intermarriage in the Samoan Migrant Community in New Zealand*. Unpublished M.A. Thesis, Univ. of Auckland.
- MAHUIKA, A.  
 1975 Leadership: Inherited and Ascribed. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks, Smith & Sons Ltd. pp. 86-114.
- MANNING, F. E.  
 1863 *Old New Zealand*. Robert J. Crighton & Alfred Scales.
- MARSDEN, Maori  
 1975 God, Men, Universe: A Maori View. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks, Smith & Sons Ltd. pp. 173-190.
- MEAD, S. M.

- 1961 *The Art of Maori Carving*. A. H. & A. W. Reed.  
1968 *The Art of Taniko Weaving*. A. H. & A. W. Reed.  
1969a *Traditional Maori Clothing*. A. H. & A. W. Reed.  
1969b Imagery Symbolism and Social Values in Maori Chants. *J.P.S.* 78(3): 378-404.  
1975 The Origins of Maori Art: Polynesian or Chinese? *Oceania* 45(3): 173-211.
- MERRILL, R. S.  
1954 Some Social and Cultural Influences on Economic Growth: The Case of the Maori. *Journal of Economic History* 14: 401-408.
- METGE, Joan  
1952 Maori Population of Northern New Zealand. *N.Z. Geographer* 8: 104-124.  
1953. Changing Pattern of Maori Population. *Te Ao Hou* 4: 11-14.  
1957 Marriage in Modern Maori Society. *Man* 57: 166-170.  
1959 Maori Population Trends. *N.Z. Geographer* 15: 98-99.  
1964a *A New Maori Migration: Rural and Urban Relations in Northern New Zealand*. London School of Economics Monographs on Social Anthropology, No. 27, The Athlone Press.  
1964b Rural Local Savings Associations (Maori Komiti) in New Zealand's Far North. In R. Firth & B. S. Yamey (ed.) *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies*. Allen & Unwin.  
1967 *The Maori of New Zealand*. Routledge & Kegan Paul.
- METGE, Joan and D. CAMPBELL  
1958 The Rakau Maori Studies: A Review Article. *J.P.S.* 67(3): 352-386.
- MISUR, G.  
1971 *From Prophet Cult to Established Church*. Unpublished M.A. Thesis, Univ. of Auckland.
- MITCALFE, Barry  
1974 *Maori Poetry: The Singing World*. Price Milburn.
- MULLIGAN, D. G.  
1957 *Maori Adolescence in Rakau*. Publications in Psychology, No. 9, Victoria Univ. of Wellington.
- ORBELL, M.  
1968 *Maori Folktales*. Blackwood & Janet Paul.
- OPPENHEIM, R. S.  
1973 *Maori Death Customs*. A. H. & A. W. Reed.
- PARR, C. J.  
1969 Before the Pai Marire. *J.P.S.* 76(1): 35-46.
- PARSONAGE, E. W.  
1956 The Education of Maoris in New Zealand. *J.P.S.* 65(1): 5-11.
- PIERCE, B. F.  
1967 A Case Study of Maori Work Attendance. *J.P.S.* 76(4): 405-414.
- PHILLIPPS, W. J.  
1943 *Maori Rafter and Taniko Patterns*. The Wingfield Press.  
1944 Carved Maori Houses of the Eastern Districts of the North Island. *Dominion Museum Records*, Vol. 1.  
1952 *Maori Houses and Food Stores*. *D.M.Mon.*, No. 8.  
1955 *Carved Maori Houses of the Western and Northern Areas of New Zealand*. R. E. Owen, Government Printer.
- PIDDINGTON, R.  
1952 Maori Child Welfare: The Cultural Background. *The New Zealand Child Welfare Workers' Bulletin*.
- PITT, D. A. and A. J. C. MACPHERSON  
1971 *Voluntary Separation and Ethnic Participation: Samoan-Migrants in Urban New Zealand*.

- Nuffield Foundation Ethnic Relations Project, Preliminary Report No. 1. Dept. of Sociology, Univ. of Auckland.
- 1974 *Emerging Pluralism: The Samoan Community in New Zealand*. Longman Paul Ltd.
- POCOCK, J. G. A. (ed.)  
 1965 *The Maori and New Zealand Politics*. Blackwood and Janet Paul.
- RANGIHAU, J.  
 1975 Being Maori. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks, Smith & Sons Ltd., pp. 221-233.
- RANGIHAU, R. H.  
 1966 The Urbanization of the Maori. *The N.Z. Social Worker* 2(1): 25.
- RANGI HIROA, Te  
 1910 Wairangi, an Ancestor of Ngati Raukawa. *J.P.S.* 19(2): 197-205.  
 1911 On the Maori Art of Weaving Cloaks, Capes, and Kites. *D.M.B.*, No. 3.  
 1921a Maori Food Supplies of Lake Rotorua. *T.N.Z.I.* 13: 433-451.  
 1921b Maori Decorative Art, House Panels. *T.N.Z.I.* 13: 452-470.  
 1923 Maori Plaited Basketry: Mats, Baskets and Burden-carriers. *T.N.Z.I.* 14: 705-742.  
 1924a Maori Plaited Basketry: Belts, Bands, and Sails. *T.N.Z.I.* 15: 344-362.  
 1924b The Passing of the Maori. *T.N.Z.I.* 15: 362-375.  
 1925a *The Coming of the Maori*. Cawthron Lecture 1922, R. W. Stiles and Co.  
 1925b The Pre-European Diet of the Maori. *N.Z. Dental Journal*.  
 1926a *The Evolution of Maori Clothing*. *P.S.M.*, No. 7.  
 1926b The Maori Craft of Netting. *T.N.Z.I.* 16: 597-646.  
 1927a Historical Maori Artifacts. *Journal of N.Z. Science and Technology* 9: 35-41.  
 1927b Maori Diet. *Medical Journal of Australia* 2: 146-150.  
 1929 Canoe Outrigger Attachments in Tahiti and New Zealand. *J.P.S.* 38(2): 182-215.  
 1931 Maori Canoe-sail in the British Museum: Additional Notes. *J.P.S.* 40(2): 136-140.  
 1938 My People, the Maori. *Asia* 38: 581-586.  
 1949 *The Coming of the Maori*. Maori Purpose Fund Board.
- RANGI HIROA, Te and B. W. AGINSKY  
 1940 Interacting Forces in the Maori Family. *American Anthropologist* 42(2): 195-210.
- REED, A. W.  
 1963a *An Illustrated Encyclopedia of Maori Life*. A. H. & A. W. Reed.  
 1963b *Treasury of Maori Folklore*. A. H. & A. W. Reed.
- RITCHIE, James  
 1956a *Basic Personality in Rakau*. Publications in Psychology No. 8, Victoria Univ. of Wellington.  
 1956b Human Problems and Educational Change in a Maori Community. *J.P.S.* 65(1): 13-34.  
 1963 *The Making of a Maori*. A. H. & A. W. Reed.  
 1964 Contact and Attitudes in the City. In James Ritchie (ed.), *Race Relations: Six New Zealand Studies*. Publications in Psychology No. 16, Victoria Univ. of Wellington.  
 1965 The Grass Roots of Maori Politics. In J. G. A. Pocock (ed.), *The Maori and New Zealand Politics*. Blackwood & Janet Paul.
- RITCHIE, James (ed.)  
 1964 *Race Relations: Six New Zealand Studies*. Publications in Psychology No. 16, Victoria Univ. of Wellington.
- RITCHIE, Jane  
 1957 *Childhood in Rakau*. Publications in Psychology No. 10, Victoria Univ. of Wellington.  
 1964 *Maori Families*. Publications in Psychology No. 17, Victoria Univ. of Wellington.
- ROWLAND, D. T.

- 1971 Maori Migration to Auckland. *N.Z. Geographer* 27: 21-37.  
1972 Processes of Maori Urbanization. *N.Z. Geographer* 28: 1-22.
- SALMOND, Anne  
1974 Rituals of Encounter Among the Maori. In J. Scherzer & R. Bauman (ed.) *Explorations in the Ethnography of Communication*. Cambridge Univ. Press. pp. 192-212.  
1975 *Hui: A Study of Maori Ceremonial Gatherings*. A. H. & A. W. Reed.  
1976 Mana Makes the Man: A Look at Maori Oratory and Politics. In M. Block (ed.) *Oratory and Authority in Traditional Societies*. Academic Press.
- SAVAGE, J.  
1807 *Some Account of New Zealand*. London.
- SCHEFFLER, H. W.  
1964 Descent Concepts and Descent Groups: The Maori Case. *J.P.S.* 73(3): 126-133.
- SCHWIMMER, E. G.  
1958 The Mediator. *J.P.S.* 67(3): 335-350.  
1960 Government and the Changing Maori. *N.Z. Journal of Public Administration* 22(2): 13-37.  
1963 Guardian Animals of the Maori. *J.P.S.* 72(3): 397-410.  
1965a The Maori Village. In J. G. A. Pocock (ed.) *The Maori and New Zealand Politics*. Blackwood and Janet Paul.  
1965b The Cognitive Aspect of Culture Change. *J.P.S.* 74(2): 149-181.  
1966 *The World of the Maori*. A. H. & A. W. Reed.
- SCHWIMMER, E. G. (ed.)  
1968 *The Maori People in the Nineteen Sixties*. Blackwood & Janet Paul.
- SHORTLAND, E.  
1856 *Traditions and Superstitions of the New Zealanders*. Longman.  
1882 *Maori Religion and Mythology*. Longman.
- SIMMONS, D. R.  
1963 *The New Zealand Myth: A Study of Discovery and Origin Traditions of the Maori*. Unpublished M.A. Thesis, Univ. of Auckland.  
1968 The Lake Hauroko Burial and the Evolution of Maori Clothing. *J.P.S.* 79(1): 22-2.  
1969 A New Zealand Myth: Kupe, Toi and the Fleet. *The N.Z. Journal of History* 3(1): 14-31.  
1971 Regional Traditions and Cultural History. *N.Z. Archaeological Association Newsletter* 14(3): 92-97.
- SINCLAIR, Keith  
1952 Maori Nationalism and the European Economy, 1850-60. *Historical Studies: Australia and New Zealand* 5(18): 119-134.  
1969 *A History of New Zealand*. Penguin Books.
- SINCLAIR, Douglas  
1975a Land: Maori View and European Response. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks, Smith & Sons Ltd., pp. 115-140.  
1975b Land Since the Treaty: The Nibble, the Bite, the Swallow. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*. Hicks, Smith & Sons Ltd., pp. 141-172.
- SKINNER, H. D.  
1921 Culture Areas in New Zealand. *J.P.S.* 30(1): 71-79.  
1924 The Origin and Relationship of Maori Material Culture and Decorative Art. *J.P.S.* 33(3): 229-243.  
1964 Crocodile and Lizard in the New Zealand Myth and Material Culture. *Records of the Otage Museum, Anthropology* No. 1.
- SMITH, Jean  
1974 *Tapu Removal in Maori Religion*. *P.S.M.*, No. 40.

- SMITH, Norman  
 1942 *Native Custom and Law Affecting Native Land*. Maori Purposes Fund Board.  
 1960 *Maori Land Law*. A. H. & A. W. Reed.
- SMITH, S. Percy  
 1899 *The Tohunga Maori: A Sketch*. *T.N.Z.I.* 32: 253-270.  
 1910a *Maori Wars of the Nineteenth Century*. Witcombe and Tombs.  
 1910b *History and Traditions of the Maoris of the West Coast*. *P.S.M.*, No. 2.  
 1913 *The Lore of the Whare Wananga*. Avery.
- SORRENSEN, M. P. K.  
 1963 *The Maori King Movement 1858-1885*. In R. Chapman & K. Sinclair (ed.), *Studies of a Small Democracy*, Paul's Book Arcade.  
 1965 *The Politics of Land*. In J. G. A. Pocock (ed.), *The Maori and New Zealand Politics*, Black & Janet Paul, Ltd. pp. 21-45.
- SUTHERLAND, I. L. G.  
 1927 *Maori Culture and Modern Ethnology*. *Australian Journal of Psychology and Philosophy* 5: 81-93, 186-201.
- SUTHERLAND, I. L. G. (ed.)  
 1940 *The Maori People Today: A General Survey*. N.Z. Council for Educational Research.
- TAYLOR, C. R. H.  
 1965 *A Pacific Bibliography* (second edition). Oxford Univ. Press.
- TAYLOR, Richard  
 1855 *Te Ika a Maori*. Wertheim & Mackintosh.
- THOMPSON, R. H. T.  
 1959 *European Attitudes to Maori: A Projective Approach*. *J.P.S.* 68: 205-210.
- TRLIN, A. D.  
 1973 *Immigrants in the Cities*. In R. J. Johnston (ed.), *Urbanization in New Zealand*, A. H. & A. W. Reed, pp. 277-310.  
 1974 *Immigrants in Auckland: A Contribution to Human Ecology*. Ph.D. Thesis, Massey Univ.  
 1975 *Western Samoan Marriage Patterns in Auckland*. *J.P.S.* 84(2): 153-175.
- TURNER, D. K.  
 1963 *Tangi*. A. H. & A. W. Reed.
- VAYDA, Andrew P.  
 1956 *Maori Conquests in Relation to the New Zealand Environment*. *J.P.S.* 65(2): 204-211.  
 1960a *Maori Warfare*. Maori Monographs No. 2. The Polynesian Society.  
 1960b *Maori Women and Maori Canibalism*. *Man* 60: 70-71.  
 1961 *Maori Prisoners and Slaves in the Nineteenth Century*. *Ethnohistory* 8: 144-155.  
 1976 *War in Ecological Perspective: Perspective, Change, and Adaptive Processes in Three Oceanian Societies*, Plenum Press.
- WALKER, R. J.  
 1969 *Proper Names in Maori Myth and Tradition*. *J.P.S.* 78(3): 405-416.  
 1970 *Maoris in a Metropolis: the Social Adjustment of the Maori to Urban Living in Auckland*. Unpublished Ph.D. Thesis, Dept. of Anthropology, Univ. of Auckland.  
 1975 *Marae: A Place to Stand*. In M. King (ed.), *Te Ao Hurihuri: Aspects of Maoritanga*, Hicks Smith & Sons, Ltd. pp. 21-34.
- WALSH, A. C. & A. D. TRLIN  
 1973 *Niuean Migration: Niuean Socio-Economic Background, Characteristics, Migrations, and Settlement in Auckland*. *J.P.S.* 82(1): 47-85.
- WEBSTER, Steven  
 1973 *Maori Adoption*. *Dept. of Anthropology Working Paper* No. 21, Univ. of Auckland.  
 1975 *Cognatic Descent Groups and the Contemporary Maori: A Preliminary Reassess-*

- ment. *J.P.S.* 84(2): 121-152.
- WHITE, J.  
1887 *The Ancient History of the Maori*. Government Printer.
- WILLIAMS, W.  
1844 *A Dictionary of the Maori Language*. Paihia.
- WILLIAMS, H. W.  
1935 The Reaction of the Maori to the Impact of Civilization. *J.P.S.* 44(3): 216-243.  
1971 *A Dictionary of the Maori Language* (7th edition). R. E. Owen, Government Printer.
- WILSON, O.  
1963 Maori and Pakeha. *J.P.S.* 72(1): 11-20.
- WILSON, Ormond  
1965 Papahurihia, First Maori Prophet. *J.P.S.* 74(4): 473-483.
- WINIATA, Maharaia  
1953 Sociological Principles and Community Development in New Zealand. *Community Development Bulletin* 4: 47-51.  
1956 Leaderships in Pre-European Maori Society. *J.P.S.* 65(3): 212-231.  
1958 Racial and Cultural Relations in New Zealand. *Phylon* 19: 286-296.  
1967 *The Changing Role of the Leader in Maori Society*. Blackwood and Janet Paul.
- WINKS, Robin W.  
1953 The Doctrine of Hauhauism. *J.P.S.* 62: 199-236.
- YATE, W.  
1835 *An Account of New Zealand*. R. S. Seeley and W. Burnside.